

【伊藤総領事メッセージ 2019 年 7 月】

2019 年 6 月のトロントでの最大のニュースは、地元のプロ・バスケットボール・チームであるトロント・ラプターズが NBA (National Basketball Association) で優勝したことだと言って間違いないでしょう。NBA の 30 チームの中で唯一カナダに本拠地を置くラプターズが初優勝を飾ったことは、トロントのみならずカナダ中で連日大ニュースとなりました。プレーオフで勝ち進むごとに国内の興奮は高まり、6 月 17 日に行われた祝賀パレードには約 100 万人が参加しトルドー首相も登場するなど、トロント市民のフィーバーも最高潮に達したといえます。この NBA チャンピオンのラプターズが 10 月に、さいたまスーパーアリーナで開催される NBA ジャパン・ゲームズで試合を行うというのは、日本のバスケットボールファンにとってもこの上ないうれしい知らせに違いありません。このチャンピオンがトロントのチームであることを、是非日本の皆様にも知っていただきたいと思えます。残念ながらラプターズには日本人選手は所属していませんが、おりしも NBA のドラフト会議では八村塁さんが 1 巡目でワシントン・ウィザーズに指名され、新シーズンでの活躍も期待されており、もしかすると来年のプレーオフには、トロントで八村選手の活躍が見られるかもしれません。

トロント・ラプターズの本拠地は、スコシアバンク・アリーナと呼ばれる建物で、NHL (National Hockey League) の地元アイスホッケーチームであるトロント・メープル・リーフスの本拠地でもあります。バスケットボールもアイスホッケーも、秋から春がシーズンとなりますが、ラプターズとメープル・リーフスは、同じアリーナを本拠地としており、時には 1 日おきにメイン会場がバスケットボール・コートになったりアイスホッケーリンクになったりしています。

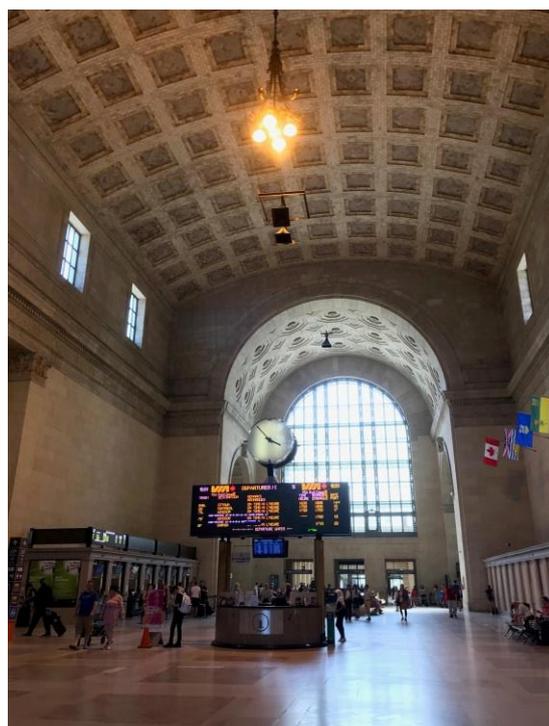
ちなみに、このスコシアバンク・アリーナには、自席までテイク・アウトができ、あるいは座席から wifi で注文して運んでもらうことも出来る寿司屋がありますが、この寿司屋のオーナーは、日本政府による文部省国費留学生としてカナダから日本にやってきた第 1 期生の一人で、かつて日本の大学で学んだ経験があるカナダ人男性です。大の日本びいきである彼は、カナダに帰国した後に日本人の職人を雇って寿司屋を始め、成功を収めます。その勢いでアリーナへの寿司スタンドの出店を提案したのですが、当初、アリーナ側からは、寿司スタンドをアイスホッケーのアリーナに出した前例もなく、成功しないのではないかと難色が示されたそうです。しかし「1 年間出店してみて、儲からなければ撤退する」との条件でスタンドを出させてもらったところ、寿司は大人気となり、それ以降ずっと店は出ており、今ではアリーナ内の 2 カ所で営業するに至っているとのことでした。

トロントには、大リーグのトロント・ブルー・ジェイズも本拠地であるロジャーズ・センターを構えています。トロント・ラプターズの優勝パレードが行われた6月17日からは、大谷翔平選手が所属するロサンゼルス・エンジェルズを迎えての4連戦が行われました。かつてはスカイ・ドームと呼ばれたこのスタジアムは、世界初の可動式屋根を導入し、日本の福岡ドームにも大きな影響を与えました。

バスケットボール、アイスホッケー、野球という、北米で人気の高い3つのスポーツでトロントはチームを擁していますが、これらのチームに共通しているのは、本拠地に最も近い公共交通機関の駅がトロント市の鉄道交通の中心であるユニオン駅だということです。ユニオン駅からスコシアバンク・アリーナへは直結しており、南へ歩いて5分程度、ロジャーズ・センターへは西へ歩いて10～15分ほどです。このユニオン駅には、トロント周辺からの通勤電車、長距離旅客列車、トロント国際空港と市街地を結ぶ急行電車（日本企業が車両を提供しました）、そして地下鉄線が発着しており、1日に約20万人の乗降客があるとされています。一つの駅からNBA、NHL、MLBの3つの試合会場に歩いて行ける便利な駅というのは、北米でも他にないのではないかと思います。

スポーツファンにとっては、試合の前後に買い出しをしたり食事をしたりする上でも便利に使えるようなユニオン駅ですが、東京駅やニューヨークのグランド・セントラルのような商業施設はまだ十分に発展していません。店の数や種類も少しずつ増えてきてはいますが、日本の駅や駅地下、駅周辺の開発と比べると、少し物寂しい感じが否めません。換言すれば、ユニオン駅は単に電車や地下鉄に乗るためだけではなく、レストランやスーパー、小売店舗等、駅にある商業施設に行くことを楽しみに人々が集まってくるような駅作りが出来る大きな可能性を秘めていると考えられます。ユニオン駅の開発には是非とも日本のモデルを参考にし、出来れば日本企業と協力してほしいところです

ユニオン駅からフィンチ駅へと北上する地下鉄のヤング線は、北米で最も混雑する地下鉄と言われ、朝夕の通勤ラッシュ時には数本待たなければ乗り込めないことも少なくありません。このような混雑緩和のために計画されている新しい路線（これまでは、その名もずばり「リリーフ・ライン」と呼ばれていましたが、現政権の下ではこの路線をさらに延長して、オンタリ



オ・サイエンス・センターとオンタリオ・プレイスを結ぶ「オンタリオ・ライン」と呼ばれています)の開通が強く期待されています。東京の地下鉄・鉄道の路線図を見せて説明すると、ほとんどすべてのカナダ人は、トロントと比較してその数のあまりの多さに驚きを隠せません。また、地下鉄のプラットフォーム・スクリーン・ドア、料金徴収システム、バリアフリー化、公共トイレの設置等、日本の経験を生かすことでトロント市民により快適で安全なサービスが提供出来るのではないかとと思われることが多くあり、是非ともカナダの政策担当者の方々には日本を訪問し、交通インフラのベスト・プラクティスを見てほしいと常々伝えてきています。

こうした中、6月25日、トロント市内において、米国公共交通協会が開催した鉄道カンファレンスの中で、日本の運輸総合研究所との共同で「開発利益還

元策による収益機会の創出」というテーマのセッションが開催され、公共交通機関および関連事業を開発し収益を上昇させた具体例が日本、カナダ、米国の出席者から披露されました。私も挨拶の中で、オンタリオ州で官民連携を進め、収益を上げる鉄道インフラ事業の可能性、日本政府がインフラ事業の海外輸出を進めており、日本企業も多くの経験とノウハウを有していること、交通インフラ分野での日加協力への期待について言及しました。



大トロント圏の人口は1年間に約10万人増加しており、10年間では100万人の人口が増えることとなります。大都市の人口問題、交通渋滞問題、気候変動問題への対処等を考える上でも、交通インフラの整備はオンタリオ州にとって重要な課題であることは間違いありません。そして、日本はオンタリオ州と協力できる重要なパートナーとなり、さらなる協力を行うことが可能であると信じています。